

論文

レジリエンスについて

庄司 順一

青山学院大学教育人間科学部

● 要約 ●

貧困家庭での生活、被虐待体験、施設養護体験、あるいは未熟児として出生することなどは、子どもの発達や精神保健上のリスクとなる。しかし、これらのリスクを持ちながらも、良好な発達や社会適応をする人がいる。このような「リスクや逆境にもかかわらず、よい社会適応をすること」をレジリエンスという。欧米では1970年代よりレジリエンス研究がはじまり、近年では児童精神医学、発達心理学、発達精神病理学などの分野で活発に研究が行われている。しかし、わが国ではようやく関心をもたれるようになってきた状況である。レジリエンスの概念は、逆境にある人を支援する児童福祉にも有用な概念であると思われるし、ソーシャルワークにおける、長所・強みを重視するストレングス視点とは関連が深いと考えられる。本論文では、レジリエンスの概念、研究動向を紹介するとともに、人間福祉学におけるその意義を検討した。

● Key words : レジリエンス, リスク, 発達精神病理学, ストレングス視点, 社会的養護

人間福祉学研究, 2 (1) : 35-47, 2009

1. はじめに

レジリエンス (resilience) について、欧米では活発な研究が行われている。しかし、わが国ではまだ研究は少なく、書籍としても筆者が把握しているのは3冊にすぎない (Wolin and Wolin, 1993; 小花和, 2004; 加藤・八木, 2009)。最近、いくつかの雑誌では特集が組まれており (『家族療法研究』第22巻第3号 (2005年), 『女性ライフサイクル研究』第16号 (2006年), 『児童心理』2007年2月号, 『臨床精神医学』第37巻第4号 (2008年), 『看護研究』第42巻第1号 (2009年)), 関心は高まってきている。

しかし、まだ日本語の表記も統一されておらず (レジリエンス, リジリアンス, レジリエンス, レジリアンスが使われている), 訳語も「(心の、あ

るいは精神的) 回復力」(Wolin and Wolin (1993) の訳書; 小塩・中谷・金子ほか, 2002), 「心の強さ」(齋藤, 2007), 「強靱性」(澤田・上田, 1997), 「しなやかな」(resilient) (奥村, 2005) などが使われることもあるが、カタカナ表記の場合が多い。

筆者は、レジリエンス概念の重要性を認識し、これまで時折紹介してきたが (庄司, 2003, 2005), 断片的なものにすぎなかった。そこで、本論文では、レジリエンス研究の動向を概観し、次いで児童福祉分野におけるこの概念の意義について検討する。

本論にすすむ前に、筆者がレジリエンスに関心をもった背景を述べておく。わが国では社会的養護は施設養護が主となっている。施設環境は建物設備など物理的環境としても、職員の数や交替制勤務など人的社会的環境としても、厳しい状況に

ある。たとえば児童養護施設の建物は老朽化がすすみ、中学生、高校生でも個室を与えられていないことも多い(下泉, 2004)。また職員配置基準は30年以上変わらないままである。施設での生活は家庭とは大きく異なり、日課により管理され、ストレスフルで、過酷なものといえるかもしれない。施設を出た若者の中には、対人関係の問題などでつまづき、ほどなく不適応な状態に陥ってしまう人もいる。たとえば、東京都内の児童養護施設を就労自立した若者の退所から6ヶ月～1年6ヶ月の時点での追跡調査によれば、退所時点で90.8%に「課題」があった。それは、人間関係、経済観念、家事等生活技術、情緒的な問題、非社会的・反社会的行為、知的能力などの問題であったが、追跡調査時点でも75.4%に課題は継続していた(東京都社会福祉協議会児童部会, 2003)。しかし、施設出身の人がすべて不適応になるわけではない。私の知っている人にも、高校を卒業し、施設を出て就労したが、自分のしたい仕事は福祉分野の仕事であると考え、退職して福祉系の大学にはいり、希望した仕事についた人がいる。人生の目標を定め、それに向かって努力し、よい結果を得たといえよう。同じような環境で過ごしながら、その後の社会的適応にどうしてこのようなちがいが生じるのか、またそのちがいにどのような条件が関係しているのだろうか。このような疑問をもっていたとき、レジリエンスという概念に出会ったのである。

子どもは環境の影響を受けるが、どの子ども同じように影響を受けるのではない。たとえば虐待は子どもの人格形成に深刻な影響を及ぼすものであるが、ときにはそのような環境で過ごしても良好な発達をとげる子どももいる。大人であっても、大災害にあい、生活を破壊され、うつ病になってしまう人がいるし、そうなる理由は十分理解できる。しかし、そうした厳しい体験にもめげず、たくましく生きていく人もおられる。このようなちがいはどういうことからたらされるのだろうか。

2. レジリエンスとは

レジリエンスということばには、英和辞典では「弾性、弾力性、跳ね返り、復元力、回復力」などの意味が記されているが、もともとはラテン語の“resilire”という動詞に由来するもので、それは“to recoil or leap back”(反動で跳ね返る、跳び戻る)という意味だという(Masten and Gewirtz, 2006)。児童精神医学(child psychiatry 子どもの精神障害の診断、治療を行う)や発達精神病理学(developmental psychopathology 子どもの心の問題の成り立ちを発達的に明らかにしようとする)においては、一般に、「リスクの存在や逆境にもかかわらず、よい社会適応をすること」という意味で使われる。Lutharらは、もう少し明確に「レジリエンスは、重大な逆境という文脈の中で、良好な適応をもたらすダイナミックな過程をいう」(Luthar, Cicchetti and Becker, 2000)と述べている。ここで注意すべきことは、レジリエンスには、「大きな脅威や深刻な逆境に曝されること」と、「良好な適応を達成すること」という2つの条件を満たすことが必要だとされることである。ほぼ同様のことは他の研究者も指摘している(Masten and Reed, 2002)。

レジリエンシー(resiliency)ということばが使われることもあるが、これは、一般的なパーソナリティ特性と誤解されやすいので用いないとされる(Luthar and Cicchetti, 2000; Masten and Gewirtz, 2006)。

3. レジリエンス研究の起源

ある人物が逆境を乗り越えて活躍するという物語は古くからあるだろう。今日のレジリエンス研究のルーツは、非常に多様な分野の先行研究にまで跡付けることができる(Cicchetti and Garnezy, 1993)。それらは、精神疾患(たとえば統合失調症)、貧困、トラウマなど発達やメンタルヘルスのさまざまなリスクを負いながらも年齢相応

の発達を遂げたり精神保健上の問題をあらわすことなく、良好な社会的適応を遂げた子ども・若者の研究である。レジリエンス研究は、いわばリスク研究の副産物として誕生した (Fraser, Kirby and Smokowski, 2004)。この分野の研究は1970年代にはじまったといえるが、初期の研究者としては、Norman Garmezy, E. J. Anthony, Lois Murphy, Michael Rutter, Emmy Werner があげられる (Masten and Gewirtz, 2006; Masten and Powell, 2003)。

Norman Garmezy は、今日のレジリエンス研究の創始者とみられる (Rolf, 1999; Cicchetti, 2003)。彼はアメリカの心理学者で、1940年代に統合失調症の研究を行っていたときに、患者によって転帰 (outcome) にかなりの幅があることに興味をもったという。統合失調症を発症し転帰不良だった人と症状をあらわしながらも社会生活を続けられた人の背景要因には大きな違いがあった。次いで統合失調症の母親をもち発症のリスクのある子どもと、統合失調症以外の精神的問題をかかえた母親の子どもとの比較研究 (つまり統合失調症の発症リスクに関する研究) を行った。さらに対象を拡大して、貧困など深刻なストレスのもとにあるにもかかわらず非常に適応的にみえる子どもの研究を行うことにした (Garmezy (1971), Rolf (1999) を参照)。そのようなリスクをもちながらも良好な適応という経過をとったのはどのようなことによるのかを明らかにしようとし、それがレジリエンス研究のはじまりということになる。とはいえ、Garmezy が今日のレジリエンスにつながる研究を発表するようになったのは1970年代になってからである。

E. James Anthony はアメリカの児童精神科医で、数多くの業績があるが、レジリエンスに関連するのは、統合失調症や躁うつ病の遺伝的リスクの高い子どもたちの追跡研究である (Anthony, 1987ab)。そして、精神疾患を発症することなく育った子どもについて「非脆弱性」(invulnerability) ということばを用いた。後述するように、

このことばはレジリエンスということばの普及により用いられなくなった。

Lois Murphy はアメリカの心理学者で、精神分析学のメニングガー・クリニックに長期間在籍し、その発達研究の責任者を15年間務めた。またヘッドスタート計画の顧問も務めた。レジリエンスに関する研究は“Vulnerability, Coping and Growth” (『脆弱性・対処・成長』, Murphy and Moriarty, 1976) や多くの論文にまとめられている (たとえば Murphy, 1974) が、わが国ではあまり知られていない。

Emmy Werner は、アメリカの発達心理学者であるが、ハワイ・カウアイ島で1955年に出生したすべての赤ん坊698人を40年間にわたって追跡調査した研究で知られている (Werner (1989, 2005) を参照)。その研究で、未熟児として生まれたことや精神疾患の親、不安定な家庭環境など、さまざまなリスクが子どもの精神保健の問題の率を高めるが、そのようなリスクをもった子どもの1/3が良好な発達、適応をとげたのであり、それは親以外の養育者 (おば、ベビーシッター、教師) などとの強い絆や、教会やYMCAなどのコミュニティ活動への関与が重要であることを示した。

Michael Rutter は英国の児童精神科医であり、自閉症、マターナル・デプリーション、アタッチメント、遺伝と環境の問題、子どもの気質、東欧の施設から国際養子縁組となった子どもたち (いわゆるチャウシェスク・ベイビー) の追跡研究など、広範囲におよぶ領域で卓越した業績をあげている。彼が中心となって編集した『児童青年精神医学』(Rutter & Taylor, 2002) は標準的なテキストである。レジリエンス研究に関しては、比較的初期から今日まで積極的に研究をすすめている (Rutter, 1981, 1985, 1990, 1993, 2006)。

4. レジリエンス研究の背景

レジリエンス研究の直接の先駆は Garmezy や Anthony らの、精神障害をもつ親に育てられた子

どもの精神障害発症にかかわるリスク研究と、Werner や Murphy らの長期縦断的研究であり、いずれにおいても、リスクを持ちながらも健常に発達し、あるいはよい社会適応をした子ども・若者の発見が契機となった。その後、レジリエンス研究が発展してきているが、その背景には関連する分野の研究、とくにリスク研究と、発達心理学における発達モデルの革新をあげることができよう。

4.1. リスク研究

個人の心理的発達や精神保健は多くの要因の影響を受けると考えられ、健常な発達や精神的健康を阻害し、不健康な、あるいは病的状態をもたらす要因（リスク因子 risk factors）の探求が行われた。もちろん、今日でもたとえば子ども虐待の発生にかかわるリスク因子の研究は行われている（たとえば、谷村・松井（1999）や益田・浅田（2004）を参照）。リスク因子を明らかにすることによって予防への道が拓かれると考えられる。

これまで、医学や臨床心理学、あるいは子ども家庭福祉においてもリスク研究が優勢であった。それは病者や心理的問題や生活上の課題をかかえたクライアントを対象としてきたからやむをえない面があった。

しかしいろいろな分野でリスク研究をすすめるうちに、リスク因子をもちながらも発達や精神保健の問題をあらわさない人たちの存在が明らかになってきた。そうした研究や見解を推し進めたのが、前述の Garmezy らレジリエンス研究の先駆者だといえる。リスク因子をもちながらも発達や精神保健上の問題をあらわさない人たちに認められる要因、条件を保護因子（protective factors）や補償因子（compensatory factors）として明らかにした。その代表的なものが、子ども虐待の発生要因に関する Kaufman & Zigler（1989）の研究である。この中で、Kaufman らは Bronfenbrenner（1979）の発達の生態学（ecology of human development）を参照し、虐待の発生確率を高め

るリスク因子と低める補償因子を、個人レベル、家族レベル、地域レベル、文化レベルから整理している（庄司，1992，2001）。

精神医学、精神保健、児童精神医学においては、精神疾患あるいは精神障害の発生について、脆弱性モデル（vulnerability model）あるいはストレス・モデル（stress model）が優勢であった（加藤・八木，2009）。これらはリスク研究に含まれるとあってよいだろう。このような個体の脆弱性、環境的なストレスが精神疾患を含む心身の問題のリスクとなり、問題が顕在化するという考え方である。このような考え方は広く普及しているが、リスクと、表れた「問題」とは同じではない。リスクは「問題」の発生頻度を高めるにすぎない。これまでは、リスクと「問題」の関連が研究されてきたが、リスクを持ちながらも「問題」をあらわさない人については関心があまりもたれなかった。

このような背景の中、前述したレジリエンス研究の先駆者は、長期にわたる縦断的研究を基礎にして、問題の発生にかかわる要因（リスク因子）とともに、問題が発生しない事実と問題の発生を防ぐ要因（protective factors）を明らかにしてきたといえるだろう。

4.2. 発達論

4.2.1. 発達の交互作用モデル

発達モデルとして、発達初期の要因によって発達の結果（outcome）が決まってしまうという主効果モデル（main-effect model）や単純な相互作用モデル（interactional model）から、交互作用モデル（transactional model）へという発達モデル（Sameroff & Chandler，1975）の革新がある。主効果モデルとは、素質（遺伝）か環境かのどちらかが子どもの将来の発達状態を決定するという考え方であり、遺伝（素質）と環境のどちらも重要であるとするのが相互作用モデルである。しかし、これは、初期の素質（遺伝）と環境との相互作用しか考えていない、静的な発達観といえる。

これに対して Sameroff らが提案したのは、相互作用が継続していくという考え方で、発達過程を力動的にとらえている。同じような考えは、子どもの気質の研究を行った Thomas, A. と Chess, S. (1977) もとっており、彼らは「複雑な相互作用」とよんだ。

いずれにしても、発達という過程を単純化せず、多くの要因の複雑な関係の過程としてとらえており、発達の結果 (outcome) は多様でありうることを示唆した。

4.2.2. 発達の生態学

生態学 (ecology) とは、生活体 (生物) の生活 (あるいは行動) を、個体の生活 (行動) としてではなく、その生活を取りまくさまざまな生物 (同じ種の仲間を含む) や非生物的な諸条件 (地理的条件など) との相互交渉の過程としてとらえる学問である。ここでのその生活体を取りまくあらゆる条件を環境という。

Bronfenbrenner は、発達を「人がその環境を受け止める受け止め方や環境に対処する仕方の継続的な変化」と定義し、「環境」について新たな考え方を提案した (Bronfenbrenner, 1979)。すなわち、人間を取りまく環境を、その人を中心にした同心円の構造として想定している。ある人間を取りまき、直接的な相互交渉が生じる場所はマイクロシステムとよばれ、家庭、学校などがこれに相当する。その外側には「発達しつつある人間が積極的に参加している」2つ以上のマイクロシステムの相互関係であるメゾシステムがある。これは、家庭と学校と遊び仲間との関係などをさす。その外側には、エクソシステムという、マイクロシステムで生じることに影響を及ぼしたり、あるいは影響されたりするような事柄が生じる場面があり、両親の職場、地域の教育委員会の活動などがこれにあたる。一番外側には、これらを含み、影響を及ぼす一貫した信念体系あるいはイデオロギー、つまり文化といえるものがあり、これはマクロシステムとよばれる。ここで重要なことは、

環境を家庭、地域、文化というように多層的にとらえるだけでなく、それぞれのシステム内の要素、およびシステム間で相互交渉があるということである。

このような考え方の背景には、人間の発達において個体と環境との相互作用が重要だとされても、実際の研究では個体にだけ (あるいは母子関係だけに) 焦点が当てられ、環境については十分検討されてこなかったことが指摘される。

環境条件をすべて視野にいれた研究はありえないことは確かであるが、子ども虐待、育児不安、不登校など、現実の問題に取り組むには発達生態学の考え方が有効であり、また不可欠であると考えられる。

C. B. Germain の「エコロジカル・ソーシャルワーク」(小島, 1992) もこのような動向と考え方を共有したものといえるのではないだろうか。

4.2.3. 子どもの気質研究

気質 (temperament) とは、個人を特徴づける、時間的、空間的に一貫した行動様式を意味する。「時間的に」というのは持続的な特徴であること、「空間的に」というのはさまざまな状況、場面でも同じような行動傾向がみられることをさしている。「性格」と関連することばで、どちらも、「その人らしさ」「その子らしさ」を意味するが、気質は生まれもった、素質的な特徴であり、性格はギリシア語の語源に「刻みつけられた」という意味があるように、後天的に形づくられる特徴とされる。ある気質特徴をもって生まれた子どもが、環境からの影響を受け、独自の性格を作り上げていく、といえるだろう。

性格や気質への関心は古代ギリシアの時代からあったが、子どもの気質について関心がもたれるようになったのは、アメリカの (児童) 精神科医 Thomas, A. と Chess, S. 夫妻による「ニューヨーク縦断的研究」(NYLS) 研究によってである。これは 1956 年に開始され、その後 30 年以上続いた (詳しくは、Thomas, Chess & Birch (1968),

Thomas & Chess (1977), 庄司 (1983, 1999) を参照).

気質という見方を加えることによって, 子どもの問題を, 親の養育態度に原因があると決めつけるような, 過度に単純化してしまうのを避けることができる.

Thomas, A. と Chess, S. らの子どもの気質研究は, 子どものある気質特徴とそれが精神病理発生への脆弱性をもつことを明らかにし, また, その特徴を持ちながらも精神病理的な問題をあらわさない条件をも論じたもので, リジリエンスということばを使ってはいないが, 関連の深い研究である.

上記のいずれの発達論も, リジリエンス研究の背景をなすものと考えられ, 発達過程が単純ではなく, 多くの要因が関与し, 時間経過の中で変化していくものであることを明らかにした.

4.3. 発達精神病理学

上述のリスク研究や発達論の革新をもとに, 子どもの精神的な問題を発達的に理解しようとする発達精神病理学 (developmental psychopathology) が発展してきた. これは, 児童精神医学と発達心理学の結婚 (Vernon, 2004) ともいわれるように, 両者を中心とした学際的な研究領域である. これが明確に論じられたのは 1984 年である (Cicchetti, 1984; Sroufe & Rutter, 1984). 1989 年にはこの分野の専門雑誌 “Development and Psychopathology” が創刊された. Cummings らの『発達精神病理学』(Cummings, Davies & Campbell, 2000) はよいテキストであり, リジリエンスについても詳しく述べられている.

5. リジリエンスに関連する概念

これまで 30 年以上にわたってリジリエンスに関連する研究は活発に行われてきた. この分野の最近の有力な研究者は, Michael Rutter, Dante Cicchetti, Ann Masten, Suniya S. Luthar らであ

る. これらの研究者は, 主に発達精神病理学の分野で研究を行っている.

リジリエンスに関連する諸概念については, Masten and Gewirtz (2006) が詳しい検討を行っているので, それをふまえて簡単に整理しておく.

リジリエンス resilience: リスクあるいは逆境という文脈における適応のポジティブなパターン.

防御因子 protective factors: リスクあるいは逆境という文脈においてとくに良好な転帰 (outcomes) あるいは発達と関連した個人, 対人関係, 文脈の測定可能な特徴.

資産あるいは促進因子: assets or promotive factors: (逆境やリスクのレベルにかかわらず) 一般的に良好な転帰 (outcomes) あるいは発達と関連した個人, 対人関係, 文脈の測定可能な特徴.

リスク risk: リスクあるいは逆境という文脈において将来のネガティブな, あるいは望ましくない転帰 (outcomes) をもたらす確率を高めること.

リスク因子 risk factors: リスクと関連した個人, 対人関係, 文脈の測定可能な特徴.

逆境 adversity: 適応に顕著なネガティブは影響や破壊的な影響をもつと予想される (あるいは観察される) 持続的あるいは反復的な体験. 通常は複数のストレスラーが関与している.

脆弱性 vulnerability: リスクあるいは逆境という文脈において特定されたネガティブな転帰 (outcomes) への影響の受けやすさ.

リジリエンスに関連することばとしては「非脆弱性」(invulnerability) や「ストレス抵抗性」(stress-resistant) など使われたが, 最終的にリジリエンス (あるいはリジリエント resilient) が残った (Masten and Reed, 2002).

ここで一つ関連するかもしれない概念, ロバス

トネスについて述べておく。ロバストネス (robustness) とはシステム論で使われる概念で、「システムが、いろいろな擾乱に対してその機能を維持する能力」をいう (北野・竹内, 2007)。人や家族もシステムと考えることができる。たとえば、環境の変化は生物に大きな影響を与えるが、生物はそのような変化に対してその機能を維持し続けることができる。ロバストネスがないと、そのシステムは脆弱性 (fragility) をもち、機能不全に陥ってしまうという。ロバストネスとの関連についてはこれまで論じられてはいないが、レジリエンスの概念を整理するときには検討する必要がある。

6. レジリエンスの定義

レジリエンスとは、「リスクや逆境にもかかわらず、よい社会適応をすること」という意味である。したがって、レジリエンスを定義するには「リスク」あるいは「逆境」と「よい社会適応」という2つの要素が必要となり (Luthar and Cicchetti, 2000; Masten and Reed, 2002; Masten and Powell, 2003; Masten and Gewirtz, 2006)、研究においては、これを明確に、あるいは操作的に定義することが必要となる。

レジリエンスには「不平等の克服」(overcoming the odds)、「ストレスの下でも維持されるコンピテンス」(sustained competence under stress)、「トラウマからの回復」(recovery from trauma) の3つの現象があるとされる (Masten, Best and Garmezy, 1990; Fraser, Kirby and Smokowski, 2004)。「不平等の克服」はリスク研究から明らかになってきたものである。リスク因子は統計的には不良な結果 (outcomes) と相関する。しかし、貧困家庭で暮らしたり、低出生体重児 (未熟児) として生まれるなど、ハイリスクであっても、発達的に、あるいは精神保健的によい結果を得ることがあり、こうした現象をさしている。「ストレスの下でも維持されるコンピテンス」

は、ストレスと対処 (stress and coping) 研究から明らかになってきたことで、たとえば両親の離婚や家庭不和など、急性あるいは慢性の大きなストレスに対する有効な対処 (coping) により、コンピテンスを維持するような場合である。「トラウマからの回復」は、虐待を受けたり暴力を目撃するなど、深刻な、持続する悪環境を経験しながらも立ち直る場合をさす。

レジリエンスがどのように達成されるかについては、さまざまな防御因子 (protective factors) が考えられた。上述のように、子どもが経験する逆境によっても異なるが、個人的、家庭的、社会的な諸要因が関係している。初期の研究では、個人の属性が重視されたが、しかし、それらは個々の因子としては転帰 (outcome) には影響しないことが明らかとなり、近年ではそれらの因子の連続的な相互作用、つまり「過程」としてとらえるべきであると考えられるようになってきた (Egeland, Carlson and Sroufe, 1993; Freitas and Downey, 1998)。つまり、高いIQをもっているかどうかではなく、身体的、心理的 (たとえばIQ)、社会的な諸要因が、時間の経過の中で、どのような相互作用をしてくるかということになる (Rutter, 1985)。

そのような要因の中で、自分あるいは自分の置かれた環境をどう捉え直すか、自分の体験をどう捉えなおすか、つまり自己理解 (self-understanding) は重要だろう (Beardslee, 1989; Kaufman and Zigler, 1989)。このことを「意味づけ」(meaning) として説明する立場もある (King, 2003; King, Cathers, Brown & MacKinnon, 2003)。自らの体験もふまえ、Walshは、「逆境にもかかわらず」ではなく「逆境をとおして」であると述べている (Walsh, 1996, 2006; Waller, 2001)。

レジリエンスは、児童精神医学や発達心理学、およびこれらを結び付けた発達精神病理学という研究分野で主に論じられてきたが、いわば領域横断的な概念 (加藤・八木, 2009) であり、精神医

学、看護学、小児保健学、教育学などでも論じられてきており、福祉分野での取り組みに興味もたれる。

7. 児童福祉分野でのレジリエンス研究

児童福祉分野ではレジリエンスを謳った研究は少ないように思われるが、それでも最近少しずつ増えているようである (Gilligan, 1999, 2000, 2001, 2004, 2009; Knitzer, 2000; Larson and Dearthmont, 2002; Fraser, 2004; Mallon, 2007; Fitzhardinge, 2008; Metzger, 2008)。後述するように、今日のストレングス・モデルはレジリエンスと非常に関連が深いと考えられるし、貧困、虐待、施設ケアはまさに「逆境」といえる環境であり、こうした環境での子どもの育ちの保障はレジリエンスにかかわる実践だともいえる。

これらの研究の中でも、Gilligan の一連の論文・モノグラフと Fraser の著書が重要だと思われる。

Robbie Gilligan は児童福祉、とくに家庭外のケアに関する分野（わが国では要保護児童分野）でレジリエンスの意義についてもっとも積極的に発言している。社会的ケアのもとにいる子どものレジリエンスを高めるためには、学校での経験と、余暇の時間の体験が重要である (Gilligan, 1999, 2000) としている。また、ソーシャルワークの対象となる人たちは逆境を経験している人たちなので、ソーシャルワーカーはレジリエンスや保護因子に関心を持つべきだと述べている (Gilligan, 2004)。

『レジリエンスの促進』(Gilligan, 2001, 2009) は、ケアのもとにいる子どもと若者に関するものである。これらの子どもたちのニーズと問題に適切に応えるのは困難ではあるが、よりよい人生を送ることができるように、そしてソーシャルワーカーや養育者にも効果があることを期待している。ある子どもがレジリエントであるのは、子どもが置かれた環境とリスクの性質、子ども・若者

の経験と特徴、そして子どもが育つ環境と人間関係の質、の複雑な相互作用の結果であるとし、個人の属性が重要だとしても、レジリエンスは支持的な文脈から立ち現れてくることを忘れてはならないと述べている。

Mark Fraser が編集した『リスクとレジリエンス』(Fraser, 2004) は、子どものリスクとレジリエンスを多角的に検討したものであり、ソーシャルワークにおいて、レジリエンスの理解が重要であることを強調している。

その他、Knitzer (2000) のモノグラフは、1989年にコロンビア大学公衆衛生学部に創設された The National Center for Children in Poverty (NCCP) の報告であるが、90年代後半のアメリカの福祉改革の影響をこうむった脆弱な (vulnerable) 人たちが、とくに貧困、薬物乱用、DV、重篤な精神保健上の問題をかかえた大人 (母親) とその幼い子どものニーズに焦点をあてたものである。親のもつこれらのリスクは、子どもの発達あるいは行動上の問題や学業の問題のリスクを高める。本論文では、このような家族に対する政策や福祉サービスの問題を指摘し、その改善のための方向性を提言している。

レジリエンスの概念は福祉分野となじみやすいものと思われる。たとえば、ソーシャルワークにおけるストレングス視点 (strength perspective) は、レジリエンスと関係が深いと考えられる。

「ソーシャルワークの発展過程において、その視点に結びつくような理念や概念が底流として存続してきた」(小松, 1996) にもかかわらず、明確になった、あるいは意識されてストレングスということばが使われるようになったのは1980年代末から90年代初めにかけてであったという。その背景には、クライアントのかかえる問題に焦点をあてた病理アプローチへの批判と反省があるのだろう。病理アプローチは、ソーシャルワーク実践のみならず、臨床心理学でも児童精神医学でもみられるし、病理からストレングスへという視点の変化は、リスクからレジリエンスへという流れ

と相同といえよう。実際、ストレンクス視点に関する書籍としてよく読まれていると思われる Saleebey (2002, 初版は 1992) の『ソーシャルワーク実践におけるストレンクス視点』(第3版)では全15章のうち3つの章でタイトルにリジリエンス(リジリエント)の語が使われている。と同時に、ストレンクスとリジリエンスが類似していることが述べられている (Saleebey, 2002, p. 2, pp. 9-13)。

8. わが国の研究動向

冒頭で述べたように、リジリエンスについて、わが国ではようやく最近関心もたれてきたところである。これまでに刊行された書籍の中では、加藤・八木(2009)の『レジリアンス』の中の大島・阿部(2009)の論文は、フランス語圏の研究を紹介しており、興味深い。また、石井(2009)はわが国の研究動向を詳しくまとめている。

わが国のリジリエンス研究は、発達心理学、臨床心理学、教育学、小児保健学、看護学、精神医学など広い分野で行われ始めている。リジリエンスは「領域横断的な概念」(加藤・八木, 2009)であり、今後もさまざまな分野での研究がなされるであろう。しかし、今日までのところ、その多くがリジリエンス尺度構成に関する研究や尺度を使った研究であり、リジリエンスの概念を「日常的なストレス」にいわば拡大している(小花和, 1999; 小塩・中谷・金子ほか, 2002; 上田・石橋, 2002; 石毛, 2003; 長内・古川, 2004; 小原・武藤, 2005; 石毛・無藤, 2006; 長田・岩本・大秦, 2006; 鈴木, 2006; 三島, 2007; 井隼・中村, 2008)ところにわが国の研究の特徴がある。しかし、このような研究方法に偏って行われている現状はのぞましいとはいえないだろう。

いろいろな研究があってもよいわけではあるが、筆者は、リジリエンスの概念を明確にし、逆境を乗り越えてきた人を対象とした研究が求められており、研究方法としては事例研究やナラティブな

ど、質的な研究によって、リジリエンスを構成する要因・条件を明らかにしていくべきではないかと考える。Waller (2001) は、リジリエンス研究には自然観察あるいは参与観察、エスノグラフィックな研究が適していると述べているが、同感である。

9. まとめ

リジリエンスはたいへん興味深く、また逆境にある人の人生を考えるうえで重要な示唆を与える概念である。とはいえ、多くの論文・書籍でその概念あるいは定義が論じられていることは、まだ研究分野として成熟していないことを示している。今後は、リジリエンスの操作的定義を明確にすること、それぞれの研究において「逆境」と「ポジティブな適応」とを明確にすることが必要である。

子ども虐待防止の歴史に関心のある人ならメアリー・エレン (Mary Ellen) の名前を聞いたことがあるのではないだろうか。アメリカの子ども虐待防止はメアリー・エレンのケースにはじまったといわれている。

1874年、メアリーは里親から虐待されていたところをエッタ・エンジェル・ホイラー (Etta Angell Wheeler) という貧しい人々への援助活動を行う宣教師の尽力によって救出された。当時メアリーは9歳で、何年にもわたるひどい虐待を受けていたのだが、救出されたあと養子となって、幸せな子ども時代をすごすことができた。のちに結婚して子どもを二人得た(最初の子はエッタと名づけた)が、その子どもたちに虐待をすることはなく、育てた (Myers, 2006)。メアリー・エレンの事件をきっかけに、1875年4月、ニューヨーク児童虐待防止協会が発足したのである。

虐待は連鎖するともいわれるが、その体験を克服することもあるのである。メアリーはまさにリジリエンスを獲得した例といえよう(庄司, 2007)。

英語には“Adversity makes a man wise.”つま

り、「逆境は人を賢くする」ということわざがある。わが国ではこれが「艱難汝を玉にす」と訳されて、「人間は苦勞することによって、立派に成長する」という教訓的な意味合いが加わってしまった（北村，2003；庄司，2005）が、環境がどのように人に影響を及ぼすかを考える上で、レジリエンスの概念は重要な視点を提示していると考えられる。

参考文献

- Anthony, E. J. (1987a) Risk, vulnerability, and resilience. in Anthony, E. J. & Cohler, Bertram J. (Eds.): *The Invulnerable Child*. The Guilford Press. pp. 3-48.
- Anthony, E. J. (1987b) Children at high-risk for psychosis growing up successfully. in Anthony, E. J. & Cohler, Bertram J. (Eds.): *The Invulnerable Child*. The Guilford Press. pp. 147-184.
- Anthony, E. J.; Cohler, Bertram J. (Eds.) (1987) *The Invulnerable Child*. The Guilford Press, 1987.
- Beardslee, William R. (1989) The role of self-understanding in resilient individuals. *American Journal of Orthopsychiatry*, 59 (2), 266-278.
- Bronfenbrenner, Urie (1979) *The Ecology of Human Development*. Harvard University Press (磯貝芳郎・福富護訳 (1996) 『人間発達の生態学』川島書店).
- Cicchetti, Dante (1984) The emergence of developmental psychopathology. *Child Development*, 55 (1), 1-7.
- Cicchetti, Dante (2003) Foreword. in Luthar, Suniya S. (Ed.) *Resilience and Vulnerability*. Cambridge University Press. pp. xix-xxvii.
- Cicchetti, Dante ; Garmezy, Norman (1993) Prospects and promises in the study of resilience. *Development and Psychopathology*, 5, 497-502.
- Cummings, E. M.; Davies, Patrick T. & Campbell, Susan B. (2000) *Developmental Psychopathology and Family Process*. The Guilford Press (菅原ますみ (監訳) (2006) 『発達精神病理学』ミネルヴァ書房).
- Egeland, Byron ; Carlson, Elizabeth, & Sroufe, L. A. (1993) Resilience as process. *Development and Psychopathology*, 5, 517-528.
- Fitzhardinge, Helen (2008) Adoption, resilience and the importance of stories. *Adoption and Fostering*, 32 (1), 58-68.
- Fraser, Mark W. (Ed.) (2004) *Risk and Resilience*. 2nd ed. NASW Press.
- Fraser, Mark W.; Kirby, Laura D., & Smokowski, Paul R. (2004) Risk and resilience in childhood. in Fraser, Mark W. (Ed.) *Risk and Resilience*. 2nd ed. NASW Press. pp. 13-66.
- Freitas, Antonio L.; Downey, Geraldine (1998) Resilience: A dynamic perspective. *International Journal of Behavioral Development*, 22 (2), 263-285.
- Garmezy, Norman (1971) Vulnerability research and the issue of primary prevention. *American Journal of Orthopsychiatry*, 41 (1), 101-116.
- Gilligan, Robbie (1999) Enhancing the resilience of children and young people in public care by mentoring their talents and interests. *Child and Family Social Work*, 4, 187-196.
- Gilligan, Robbie (2000) Adversity, resilience and young people: The protective value of positive school and spare time experiences. *Children and Society*, 14, 37-47.
- Gilligan, Robbie (2001) *Promoting Resilience*. British Agencies for Adoption and Fostering.
- Gilligan, Robbie (2004) Promoting resilience in child and family social work. *Social Work Education*, 23 (1), 93-104.
- Gilligan, Robbie (2009) *Promoting Resilience*. 2nd ed. British Agencies for Adoption and Fostering.
- Henry, Darla L. (1999) Resilience in maltreated children: Implications for special needs adoption. *Child Welfare*, 78 (5), 519-540.
- 井隼経子・中村知靖 (2008) 「資源の認知と活用を考慮した resilience の 4 側面を測定する 4 つの尺度」『パーソナリティ研究』17(1), 39-49.
- 石毛みどり・無藤隆 (2005) 「中学生における精神的健康とレジリエンスおよびソーシャル・サポートとの関連—受験期の学業場面に着目して—」『教育心理学研究』53(3), 356-367, 2005.
- 石毛みどり・無藤隆 (2006) 「中学生のレジリエンスとパーソナリティとの関連」『パーソナリティ研究』14(3), 266-280.
- 石井京子 (2009) 「レジリエンスの定義と研究動向」『看護研究』42(1), 3-14.
- 加藤敏・八木剛平 (編) (2009) 『レジリエンス—現代精神医学の新しいパラダイム—』金原出版.
- Kaufman, Joan ; Zigler, Edward (1989) The in-

- tergenerational transmission of child abuse. in Cicchetti, Dante & Carlson, Vicki (Eds.): *Child Maltreatment*. Cambridge University Press. pp. 129-150.
- King, Gillian A.; Cathers, T.; Brown, Elizabeth G., & MacKinnon, Elizabeth (2003) Turning points: Emotionally compelling life experiences. in King, Gillian A., Brown, Elizabeth G., & Smith, Linda K. *Resilience: Learning from People with Disabilities and the Turning Points in Their Lives*. Praeger. pp. 31-88.
- King, Gillian A. (2003) Tying it all together: Frames of reference and meaning in life. in King, Gillian A., Brown, Elizabeth G., & Smith, Linda K. *Resilience: Learning from People with Disabilities and the Turning Points in Their Lives*. Praeger. pp. 153-194.
- 北村孝一 (2003) 『ことわざの謎』 光文社.
- 北野宏明・竹内薫 (2007) 『したたかな生命』 ダイアモンド社, 2007.
- Knitzer, Jane (2000) Promoting resilience: Helping young children and parents affected by substance abuse, domestic violence, and depression in the context of welfare reform. *Children and Welfare Reform*, Issue Brief 8, National Center for Children in Poverty.
- 小島蓉子 (編訳) (1992) 『エコロジカル・ソーシャルワーカーカレル・ジャーメイン名論文集一』 学苑社.
- 小松源助 (1996) 「ソーシャルワーク実践におけるストレングス視点の特質とその展開」『ソーシャルワーク研究』 22(1), 46-55.
- 小塩慎司・中谷素之・金子一史ほか (2002) 「ネガティブな出来事からの立ち直りを導く心理的特性—精神的回復力尺度の作成—」『カウンセリング研究』 35, 57-65.
- Larson, Nancy C.; Dearthmont, Melissa (2002) Strength of farming communities in fostering resilience in children. *Child Welfare*, 81 (5), 821-835.
- Luthar, Suniya S.; Cicchetti, Dante (2000) The construct of resilience: Implications for interventions and social policies. *Development and Psychopathology*, 12, 857-885.
- Luthar, Suniya S.; Cicchetti, Dante, & Becker, Bronwyn (2000) The construct of resilience: A critical evaluation and guidelines for future work. *Child Development*, 71 (3), 543-562.
- Mallon, James (2007) Returning to education after care: Protective factors in the development of resilience. *Adoption and Fostering*, 31 (1), 106-117.
- Masten, Ann S.; Best, Karin M., & Garmezy, Norman (1990) Resilience and development. *Development and Psychopathology*, 2, 425-444.
- Masten, Ann ; Gewirtz, Abigail H. (2006) Vulnerability and resilience in early child development. in McCartney, Kathleen & Phillips, Deborah (Eds.) *Blackwell Handbook of Early Childhood Development*. Blackwell. pp. 22-43.
- Masten, Ann ; Powell, Jenifer L. (2003) A resilience framework for research, policy, and practice. in Luthar, Suniya S. (Ed.) *Resilience and Vulnerability*. Cambridge University Press. pp. 1-25.
- Masten, Ann S.; Reed, Marie-Gabrielle, J. (2002) Resilience and development. in Snyder, C. R. and Lopez, Shane J. (Eds.): *Handbook of Positive Psychology*. Oxford University Press. pp. 74-88.
- 益田早苗・浅田豊 (2004) 「虐待する親のリスク要因に関する実態調査」『子どもの虐待とネグレクト』 6 (3), 372-381.
- Metzger, Jed (2008) Resiliency in children and youth in kinship care and family foster care. *Child Welfare*, 87 (6), 115-140.
- Murphy, Lois B. (1974) Coping, vulnerability, and resilience in childhood. in Coelho, George W., Hamburg, David A. & Adams, John E. (Eds.) *Coping and Adaptation*. Basic Books. pp. 69-100.
- Murphy, Lois B.; Moriarty, A. F. (1976) *Vulnerability, Coping, and Growth*. Yale University Press.
- Myers, John E. B. (2006) *Child Protection in America: Past, Present, and Future*. Oxford University Press.
- 小花和 Wright 尚子 (2004) 『幼児期のレジリエンス』 ナカニシヤ出版.
- 大島一成・阿部又一郎 (2009) 「レジリエンス概念の歴史と現状—フランス語圏を中心に—」加藤敏・八木剛平 (編) 『レジリエンス』 金原出版. pp. 25-49.
- 奥村幸夫 (2005) 「シンポジウムによせて」『家族療法研究』 22(3), 204-205.
- Rolf, Jon E. (edited by Glantz, Meyer D.) (1999) Resilience: An interview with Norman Garmezy. in Glantz, Meyer D. & Johnson, Jeannette L. (Ed.) (1999) *Resilience and Development*.

- Kluwer Academic/Plenum Publishers. pp. 5-14.
- Rutter, Michael (1981) Stress, coping, and development. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 22, 323-356.
- Rutter, Michael (1985) Resilience in the face of adversity. *British Journal of Psychiatry*, 147, 598-611.
- Rutter, Michael (1990) Psychosocial resilience and protective mechanisms. in Rolf, Jon, Masten, Ann S., Cicchetti, Dante, Nuechterlein, Keith H., & Weintraub, Sheldon (Eds) *Risk and Protective Factors in the Development of Psychopathology*. Cambridge University Press. pp. 181-214.
- Rutter, Michael (1993) Resilience: Some conceptual considerations. *Journal of Adolescent Health*, 14, 626-641.
- Rutter, Michael (2006) Implications of resilience concepts for scientific understanding. *Annals of the New York Academy of Sciences*, 1094, 1-12.
- Rutter, Michael ; Taylor, Eric (Eds.) (2002) *Child and Adolescent Psychiatry*. 4th ed. Blackwell.
- 齋藤耕二 (2007) 「心の「強さ」(レジリエンス)とは何か」『児童心理』61(2), 12-17.
- Saleebey, Dennis (2002) *The Strength Perspective in Social Work Practice*. 3rd ed. Allyn and Bacon.
- Sameroff, Arnold J.; Chandler, Michael J. (1975) Reproductive risk and the continuum of caretaking casualty. in Horowitz, Francis D. (Ed.) *Review of Child Development Research*. University of Chicago Press. pp. 187-243.
- 澤田和美・上田礼子 (1997) 「病気の乳幼児と母親の養育性—強韌性 (Resilience) 育成の視点から—」『小児保健研究』56(4), 562-568.
- Schofield, Gillian (2001) Resilience and family placement. *Adoption and Fostering*, 25 (3), 6-19.
- 下泉秀夫 (2004) 「老朽化する児童養護施設」『子どもの虐待とネグレクト』6(3), 273-282.
- 庄司順一 (1983) 「正常児の行動」『小児医学』, 16(1), 1-20.
- 庄司順一 (1992) 「小児虐待」『小児保健研究』51(3), 341-350.
- 庄司順一 (1999) 「子どもの気質と発達」『小児保健研究』58(2), 132-137.
- 庄司順一 (2001) 『子ども虐待の理解と対応』フレーベル館.
- 庄司順一 (2003) 『フォスターケア』明石書店.
- 庄司順一 (2005) 「レジリエンス」『保育界』2005年7月号, 42-43.
- 庄司順一 (2007) 「メアリー・エレン再び」『子どもの虐待とネグレクト』9(3), 273-276.
- Sroufe, L. A.; Rutter, Michael (1984) The domain of developmental psychopathology. *Child Development*, 55 (1), 17-29.
- 高辻千恵 (2002) 「幼児の園生活におけるレジリエンス: 尺度の作成と対人葛藤場面への反応による妥当性の検討」『教育心理学研究』50(4), 427-435.
- 谷村雅子・松井一郎 (1999) 「子ども虐待のリスク要因」『保健の科学』41(8), 577-582.
- Thomas, Alexander ; Chess, Stella, & Birch, Herbert G. (1968) *Temperament and Behavior Disorders in Children*. New York University Press.
- Thomas, Alexander ; Chess, Stella (1977) *Temperament and Development*. Brunner/Mazel.
- 東京都社会福祉協議会児童部会 (2003) 「児童養護施設退所児童の追跡調査」『紀要』6, 23-32.
- Vernon, R. F. (2004) A brief history of resilience. in Clauss-Ehlers, Caroline & Weist, Mark D. (Eds.) (2004) *Community Planning to Foster Resilience in Children*. Kluwer Academic Publishers. pp. 13-26.
- Waller, Margaret A. (2001) Resilience in ecosystemic concept. *American Journal of Orthopsychiatry*, 71 (3), 290-297.
- Walsh, Froma (1996) The concept of family resilience. *Family Process*, 35 (3), 261-281.
- Walsh, Froma (2006) *Strengthening Family Resilience*. 2nd ed. The Guilford Press.
- Werner, Emmy (1989) High-risk children in young adulthood. A longitudinal study from birth to 32 years. *American Journal of Orthopsychiatry*, 59 (1), 72-81.
- Werner, Emmy (2005) Resilience research: Past, present, and future. in Peters, Ray D., Leadbeater, Bonnie & McMahon, Robert J.: *Resilience in Children, Families, and Communities*. Kluwer Academic/Plenum Publishers, pp. 3-11
- Wolin, Steven J.; Wolin, Sybil (1993) *The Resilient Self*. Villard Books (奥野光・小森康永訳 (2002) 『サバイバーと心の回復力』金剛出版).

Resilience

Junichi Shoji

Aoyama Gakuin University, College of Education, Psychology and Human Studies

Children who live in poverty, have abused, has been in institutional care, or born prematurely have serious risks in terms of development and mental health problems. However, despite bearing these risk factors, some of these children do well, going on to develop normally and showing good social adaptation. Resilience means achieving these positive outcomes in the face of risk factors or adversity. In Europe and the U.S.A., studies of resilience began in the 1970's, and actively continue today in the fields of child psychiatry, developmental psychology and developmental psychopathology, but an interest in this field is only finally reaching Japan. The concept of resilience is one useful to the child welfare supporting those facing adversity and in social work can also be thought to have a deep similarity to the "strength perspective," which puts importance on the individual's positive characteristics and strengths. In this paper, the author reviews the resilience concept and recent studies, and discusses the usefulness and significance of the resilience concept in the field of human welfare.

Key words: resilience, risk, developmental psychopathology, strength perspective, child care